

秋田県埋蔵文化財センター

平成二十一年度第二回企画展パンフレット

亀

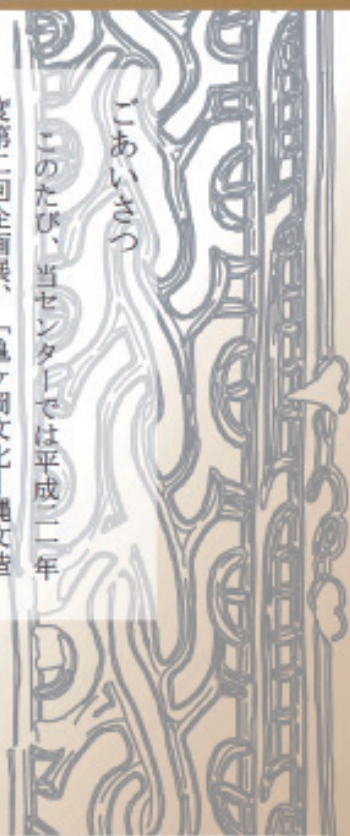
ヶ

岡文化

縄文造形の

華

—



このたび、当センターでは平成二二年
度第二回企画展、「亀ヶ岡文化―縄文造
形の華―」を、平成二二年一月七日か
ら平成二二年二月二十八日まで開催いたし
ます。

亀ヶ岡文化は東北地方を代表する縄文
時代晩期の文化です。長い縄文時代の最
後に花開いた世界に誇るべき文化で、そ
の造形美は各方面から注目され、高い評
価を受けています。本県でもこれまでに
数多くの亀ヶ岡文化の遺跡が発掘調査さ
れました。

本企画展では、これまでの発掘で出土
した土器を中心に、土偶、漆塗り製品、
石製品などの亀ヶ岡文化を特徴付ける造
形美にふれていただきます。そして、当
時の人々の感性や工芸技術、暮らし、社
会、精神世界について皆さんと考えてみ
たいと思います。また、縄文時代に続く
時代の出土品とも見比べていただき、時
代の移り変わりを感じ取っていただだけば
と思います。

これを機会に本県の埋蔵文化財と歴史、
文化について愛着と誇りを持っていただ
けるよう願っております。

秋田県埋蔵文化財センター所長



亀ヶ岡文化は、今から三千二千年三百年前、東北地方北部を中心に展
開した日本列島の先史文化の一つです。



菅江真澄『新古祝器品類之図』所載
亀ヶ岡式土器の図

江戸時代の紀行家、菅江真澄（1754～1829）が、
1820年頃に北秋田比内地方の所蔵家に伝わる亀ヶ岡
式土器を描いた図です。真澄はこの図を描く以前に
津軽を旅し亀ヶ岡遺跡についての記録も残していま
す（『迫柯呂能通度』）。亀ヶ岡式土器を描いた図
としては最も古い写生図です。

大館市立中央図書館蔵 真崎文庫より複製

うるし した 漆下遺跡

(北秋田市森吉)



米代川支流阿仁川の流域、森吉山の北麓を東西に流れる小又川左岸にある縄文時代後期の遺跡です。
小又川に沿って細長く残った段丘の上、西側平坦面には百棟以上の掘立柱建物跡や土坑墓群があり、平坦面の北側斜面には石積みの階段が作られています。また、北東側の平坦面には十数基の配石遺構があり、一部には下に土坑墓が作られていました。
西側の平坦面周囲には大量の土器や石器などの捨て場四ヶ所がありました。そこからは石棒や石剣など、おもに儀式に用いられた品々や、土器や繊維製品などの漆工芸品、そして漆液を貯めた容器が出土しました。
小又川の谷に暮らした人々が折々に集って先祖供養の儀礼を行った遺跡であったようです。



漆下遺跡の全景と配石土坑墓

発掘調査当時（平成14年）の遺跡全景と見つかった配石土坑墓です。全部で約80基見つかりました。

一万年以上続いた縄文時代の最後を飾った土器文化、それが東北地方北部を中心に栄えた亀ヶ岡文化です。特に縄文造形の極致ともいえる土器は、浅鉢、台付鉢、皿、壺、注口など、多様な器の種類と、その表面に施された華麗な文様で知られます。
縄文時代前半の土器はバケツを縦に伸ばしたような、深鉢がその形の基本です。しかし、その後半になると、深鉢に加え、台付鉢や浅鉢、壺そして注口など、さまざまな種類の土器が登場するようになります。表面の装飾もヘラで描いた繊細な文様が多くなり、全体に黒くつやのある土器が作られるようになります。縄文時代後半に登場するこの多彩な土器群を、亀ヶ岡文化の土器の芽生えと見ることが出来ます。



漆下遺跡出土の深鉢

亀ヶ岡文化直前の深鉢です。3ないし5単位の突起がつく、あるいは波打った口になるのが特徴です。深鉢の突起あるいは波状の口はこれ以降減少し、亀ヶ岡文化では平らな口へと変わります。しかし、3ないし5単位の数は亀ヶ岡文化の浅鉢等の文様へと受け継がれていきます。

多くの種類の器、また一つの種類のなかでも、形の変化に富むことで知られる亀ヶ岡式土器ですが、菅江真澄の図にもあるように、ことに、急須のように注ぎ口のついた「注口土器」の豊富さが特徴です。そしてこの豊富な注口土器は既に亀ヶ岡文化以前、縄文時代後期後半から多く見られるようになります。

注ぎ口が付くことから、液体を容れたことは間違いないのですが、土器自体が装飾性に富むことから、日常的に使用されたのではなく、やはり、儀式の場などで用いられたことが考えられます。

縄文時代には既にニワトコやサルナシなどを使った果実酒の醸造技術があったことが知られています。儀式に集った人々の精神を高揚させ、折りの世界に導くには果実で作った酒が使われたのかも知れません。



多孔底土器

小さな円いボールのような形にたくさんの孔をあけた土器です。液体を濾すのに用いたか、あるいは蒸し器に用いられた器のようです。



漆下遺跡出土の注口土器

底が小さく台状に高くなった直径30cmを超える大型鉢、突起を付けたり表面に瘤のある壺、口に小さな瘤があるだけの鉢、各種の器に注ぎ口が設けられます。土器の大きさでも作り分けがあり、また、時間とともに器の形も変化したようです。

リーダー誕生

動物を狩り、木の実や山菜などを採集し食料を得ていた縄文時代の社会は、貧富のかたよりのない平等な社会であると考えられています。日本の歴史のなかでは、縄文時代の後、弥生時代になって富の集積に伴い権力が生まれ、国家誕生にかかわる首長制社会が成立したと説明されます。ところが、近年の縄文時代社会の研究は、狩猟・採集などその経済の多くを自然に依存した社会であっても、祭祀や儀礼の発達により階層化した社会がすでに登場していたことを明らかにしつつあります。

計画的な食料生産がむずかしいと思われるがちな縄文時代の狩猟・採集経済の社会でも、クリやクルミ、トチやドングリなどの堅果類を地下の貯蔵穴に貯めることは既に行われていました。こうした堅果類はアク抜きを必要とする種類も多いのですが、既に後期には専用の水さらし場でアクを抜き、製粉する技術も確立していました。また、海から数十kmも離れた遺跡での海産の魚骨の出土から、魚を腐らせずに運ぶための乾燥・燻製・塩蔵など加工技術があったことが推測され、実際に塩を生産した遺跡も見つかっています。

自然からの獲得物であっても、その加工によってある程度の富の集積がなされること、それを背景としての交易も発達し、遠隔地からもたらされる希少価値をもつ物資など、財物が蓄えられる社会が成立していました。そして重要なことは、食料や希少財などの物資がもつ経済価値以上に、社会がその組織を維持・継続するために祭祀・儀礼の体系を発達させていたことです。

亀ヶ岡文化あるいはそれ以前の縄文時代後期の遺跡からは、生産にかかわる実用的な土器や石器以外に、過度と思えるほど装飾を施した土器、呪術性に富んだ土製・石製のタブレット（土版・岩版）、人体を造形した土偶・岩偶、また、大小・精粗の耳飾りや玉類からなる装身具、そして儀器として使用された石棒・石剣・石刀など、人々の精神性にかかわる様々な製品が数多く出土します。これら豊富な品々からは社会の祭祀・儀礼の発達や、社会を構成した人々が年齢や役割に応じていくつもの階層に分かれていたことが考えられます。

縄文時代、ことにその後半から亀ヶ岡文化が栄えた終わりにかけては、このような社会の複雑化が進み、リーダーと呼べる存在が出現したと考えられるようになっていきます。こうした特徴の社会を「階層化過程にある社会」(“Trans-egalitarian Societies”)と呼ぶこともあります。

参考 高橋龍三郎「総論」『現代の考古学6 村落と社会の考古学』

朝倉書店 二〇〇一



海辺のムラの塩作り
(復元画：早川和子氏)

亀ヶ岡文化が始まる頃、太平洋側の縄文ムラでは盛んに塩作りが行われました。海水を煮詰めて作った塩は日本海側にも運ばれて、塩漬けなどの食料加工に用いられました。宮城県里浜貝塚の塩作りの様子です。



リーダーの墓

横手市虫内Ⅲ遺跡では60基の土坑墓、33基の土器棺墓が見つかり、亀ヶ岡文化の墓地が営まれていたことが明らかになった遺跡です。土坑墓のうちの1基からは、上の写真の3つの玉からなるペンダント、長さ70cmあまりの石剣が出土しました。集団のなかのリーダーの墓と考えられます。

「成興野型」石棒

(左から、横手市オホン清水A遺跡、北秋田市漆下遺跡、能代市上母体遺跡出土)

亀ヶ岡文化より少し前、縄文時代後期後半の時期、北海道を含む東日本で盛行した石棒です。両端に精細な彫刻を施した頭部が設けられることが特徴で、特に北海道では墓地に副葬される例が目立ちます。横手市オホン清水A遺跡の石棒はやはり土坑墓からの出土で本州例としては数少ない事例であり、リーダーの位階を示す品として副葬されたと考えられます。



むかいさまだ
向様田 A 遺跡
向様田 D 遺跡
(北秋田市森吉)



小又川を挟んで、漆下遺跡の対岸にある縄文時代晩期前半の遺跡です。A遺跡、D遺跡を含んで全部で五地点がありますが、一連の遺跡であり配石遺構群、土坑墓群などからなる、祭祀および墓地の遺跡です。

配石遺構には堅穴住居のように、中心に石囲炉状の組石をもつものがあります。組石の脇からは、故意に折られた石刀が出土しています。また、他の石囲炉状の一对の組石には埋設土器と立石が伴っていました。埋設土器は女性を、立石は男性を象徴したものと考えられます。

土坑墓からは遺体が身につけていた首飾りなどが出土し、また、土坑墓群の近くには、沢山の土器が集められていた首飾りなどがありました。墓地での儀礼に伴い、使用された土器が、持ち去られずその場に積み上げられたようです。



二つ並んだ配石遺構
石囲炉状の配石の中心に左は土器を、右は立石を置いています。女性と男性を表したものでしょう。



向様田 A 遺跡、D 遺跡の全景
両遺跡とも小又川右岸にあります。向様田 A 遺跡は川縁のたくさんの川原石がある場所、向様田 D 遺跡は山際の部分です。



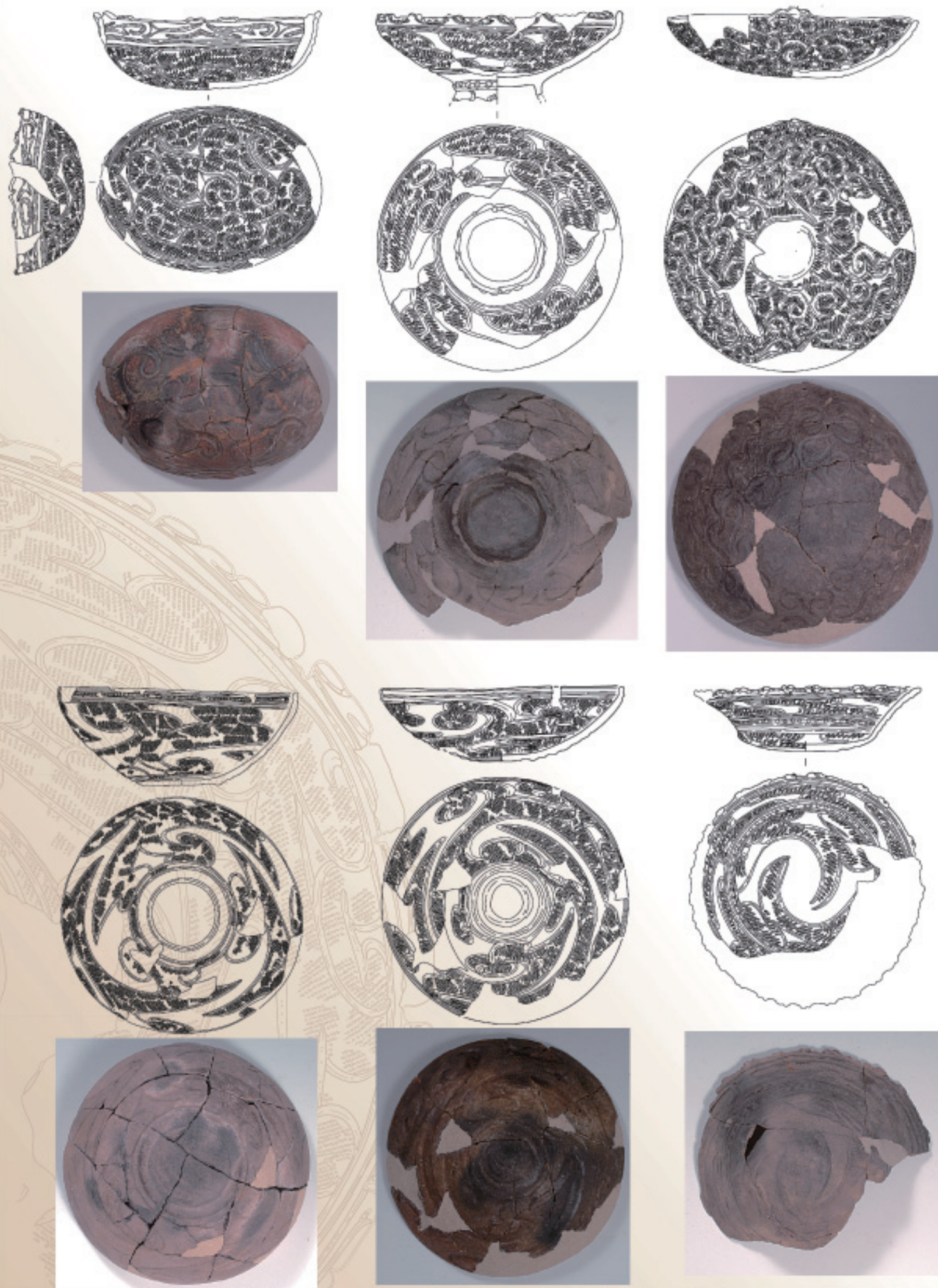
土坑墓群の近くに積み上げられた土器
向様田 A 遺跡の墓地の近くにはこのようにたくさんの土器が積み上げられた「捨て場」が2ヶ所ありました。壊れて使えなくなった土器ばかりでなく、完全なままの土器も多くあります。



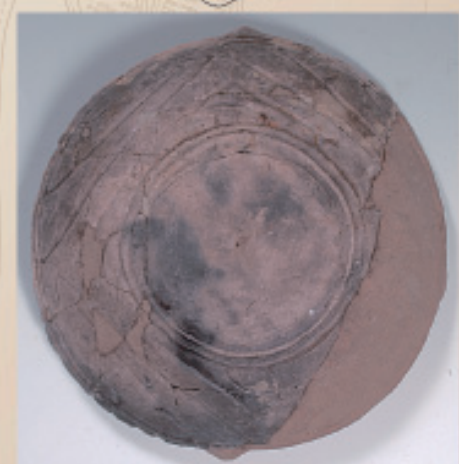
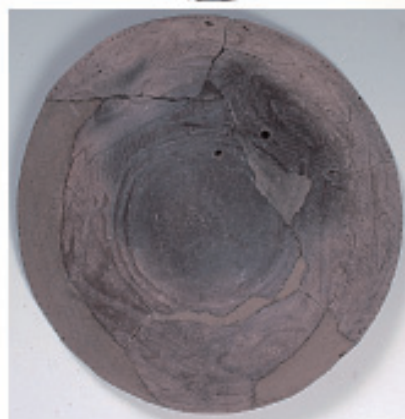
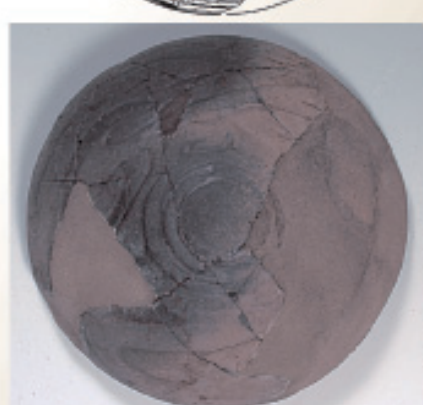
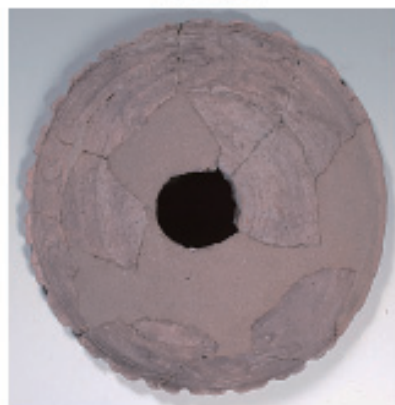
住居のように作った配石遺構と折られた石刀
中央に石囲炉状に組んだ配石があり、その脇の柱穴にあたる部分(矢印)で折られた石刀が出土しました。



向様田 A 遺跡出土 顔面装飾付鉢
向様田 A 遺跡の土坑墓群の近くから出土した土偶のような顔を表した土器です。一部に赤い顔料(ベンガラ)が残っています。先祖を供養する儀式に用いられた器でしょう。



向様田A遺跡 浅鉢文様

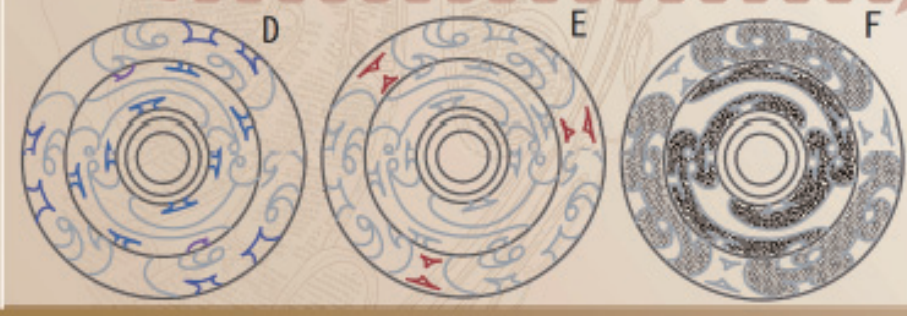
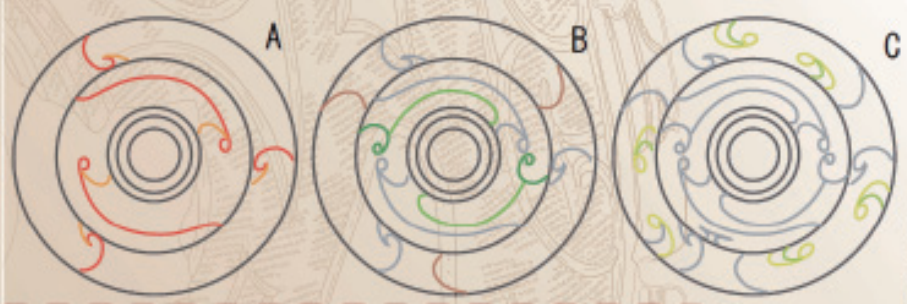
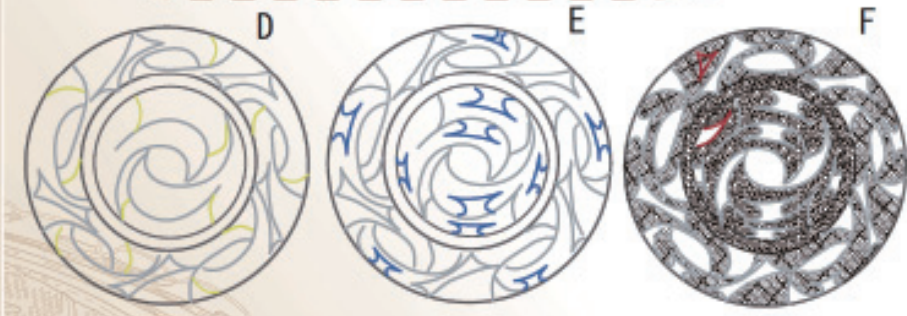
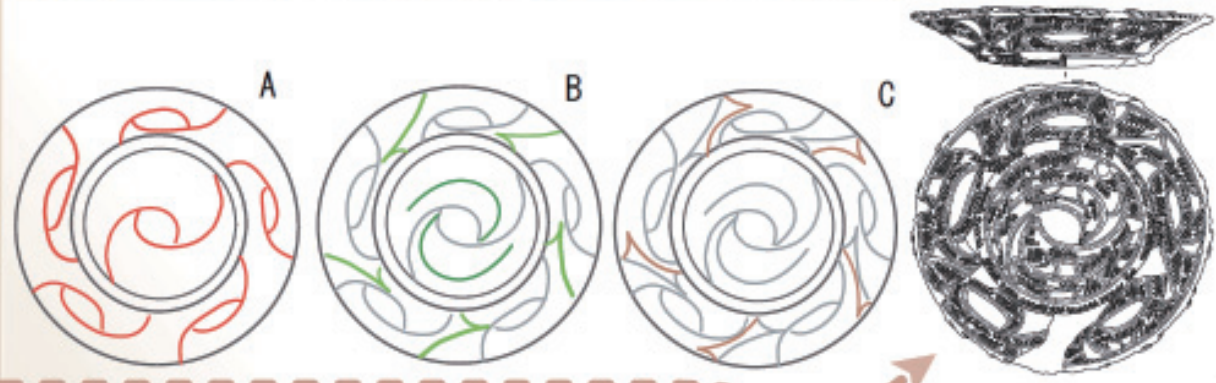


向様田D遺跡 浅鉢文様

亀ヶ岡文様の描き方―点対称の美しさ―

複雑な曲線と縄文からなる亀ヶ岡式浅鉢の文様も、描画法を観察すると意外に単純な線を繰り返して描いたことがわかります。下図を例に説明しましょう。末端が湾曲あるいは渦巻きになる短い曲線を組み合わせ、円形面を二〜三分割することから描き始めます(A)。次いで、Aの分割線と対応し縄文部分を区画する曲線を描きます(B)。そして、縄文部分の内部に、端が渦巻ききの曲線文(C)を、さらに四叉文や鍵形文(D)を加え、最後に縄文のない部分に向かい合う三叉文(E)を加えて完成です。A、Bは円形のキャンパスを分割する区画線、D、Eはその区画に充填した文様です。それらを円の中心に対し、順次点対称に配置することで、複雑でありながら均整のとれた文様に形作ることができます。

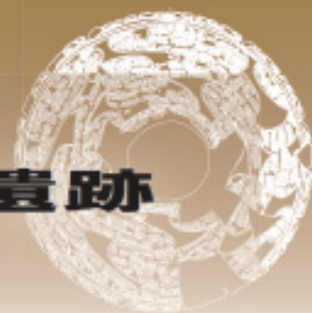
参考 高橋龍三郎「亀ヶ岡式土器の研究」『北奥古代文化』十二号一九八一年
 藤沼邦彦「文様の描き方―亀ヶ岡式土器の雲形文の場合―」『縄文文化の研究5』一九八二年



ふじ かぶ
藤 株 遺 跡

たい
からむし岱 I 遺跡

(北秋田市鷹巣)



藤株遺跡
JR鷹巣駅の南東約二・五kmの小森川の東側台地にある縄文時代晩期を中心とする遺跡です。明治の頃から全国的に知られ、喜田貞吉、清野謙次などが調査したことで著名な遺跡です。また、山内清男の亀ヶ岡式土器の細別型式のうち大洞BC式の設定に際し、出土土器が標式とされたことでも知られます。昭和五年の発掘調査で竪穴住居跡、土坑墓などのほか多量の土器・石器が発見されました。晩期の土坑墓は八六基あり、内一基から頭部のない火葬人骨が出土しました。人骨は成年または熟年の女性のもので、はじめから頭部を欠いたまま火葬された可能性が指摘されています。これとは別に頭が作られていない胴体だけの土偶もあり、興味を引くところです。



首無し人骨の火葬墓

長さ193cm、幅95cmの土坑から火葬された人骨が見つかりました。手前が上半身側ですが頭骨は見つかりませんでした。土坑内で首無しの遺体が火葬されたようです。



藤株遺跡注口土器

扁平な球胴の壺に注ぎ口の付いた注口土器です。注ぎ口の周囲を除いて表面には文様がなく、亀ヶ岡文化の注口土器としては古い形のものです。



からむし岱 I 遺跡 遺物出土状態

台地北側の斜面にみつかった捨て場から石剣、注口土器が見つかった状態です。注口土器の一つ(中央写真)は、小さな穴に横倒しに埋め込まれた状態で出土しました。



注口土器 径30cmと大型です。



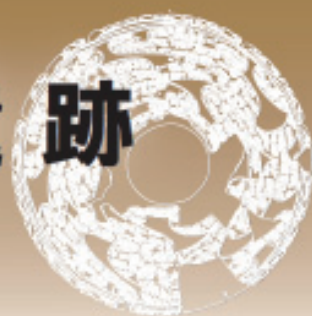
片口付土器

からむし岱 I 遺跡
JR鷹巣駅の南約三・三kmの大野台地北東部にあります。縄文時代晩期の遺構として掘立柱建物跡一棟、捨て場一ヶ所が見つかりました。捨て場からは小型壺形土器、注口土器、片口付土器、石鏃、石刀などが出土しました。片口付土器は注ぎ口が短く、指で口縁部を押し出して作っており、晩期では類例が少ないものです。これらの出土品は雄物川流域の横手市前通遺跡とほぼ同じ晩期中〜後葉にあたります。

ふた え どり

二重鳥A遺跡

(北秋田市森吉)



森吉山ダム建設地の小又川左岸の漆下遺跡より一段高い段丘面上に位置します。亀ヶ岡文化の終わりに近い堅穴住居跡三軒、土坑四七基などが発見されました。一つの堅穴住居跡には深鉢、浅鉢、壺、台付鉢、土偶などがままって投げ捨てられていました。住居が使われなくなった後、これらの遺物を連綿と捨て続けたようです。また、遺跡中央の斜面の窪地も捨て場として使われ、土器のほか石剣、独結石、玉類、岩偶などがやはりまとまって捨てられていました。いずれも儀礼用に作られた製品であり、何らかの儀式の後、投棄されたものと思われれます。



二重鳥A遺跡全景

遺跡を西上空より撮影した写真です。遺跡西側の平坦面の住居跡（黄色矢印）と中央の沢状の窪地（緑色矢印）から、縄文時代晩期終末（亀ヶ岡文化終わり頃）の多くの遺物が捨てられた状態で見つかりました。



住居跡調査状況と遺物出土状況

堅穴住居跡の中からたくさんの遺物が出土しました。埋まった土の中からは、ほぼ完全な形の壺などが出土しています。



調査区中央窪地での壺出土状況

小型の壺が沢状の窪地から出土しました。窪地は縄文時代前期から捨て場として使われていたようです。



壺二つ

左は堅穴住居跡出土の壺、右は堅穴住居跡の西側の土坑上面から出土した壺です。右の胴体には円く大きな穴が開けられています。自然と共生した縄文時代にはモノにすら生命があると考えていたようです。役割を終えた器には穴を開け、その生命をあの世へと送っていたのでしょう。



独結石(上)と石製垂飾品(右)

調査区中央の沢状の窪地から土器などとともに出土しました。仏具に似た形からその名のある独結石は儀式的の場面で用いられたと考えられています。頁岩で作られた垂飾品とともに使用された後に捨てられたようです。



かしこどころ 柏子所貝塚

(能代市柏子所)



貝輪と土製腕輪(向様田D遺跡)

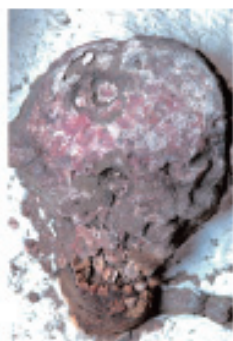
埋葬人骨のうち、新生児ないし幼児である3号人骨は腕に5個の貝輪を装着していました。これ以外にも柏子所貝塚からは1,270点ものサルボウ、ペンケイガイ製の貝輪が出土しています。左はその一部です。また、より内陸の向様田D遺跡からは、オオツタノハ製の貝輪をまねた土製腕輪が出土しています(写真上)。南海産の貝を模して作られ、赤くベンガラが塗られた腕輪は権威の象徴であったかもしれません。



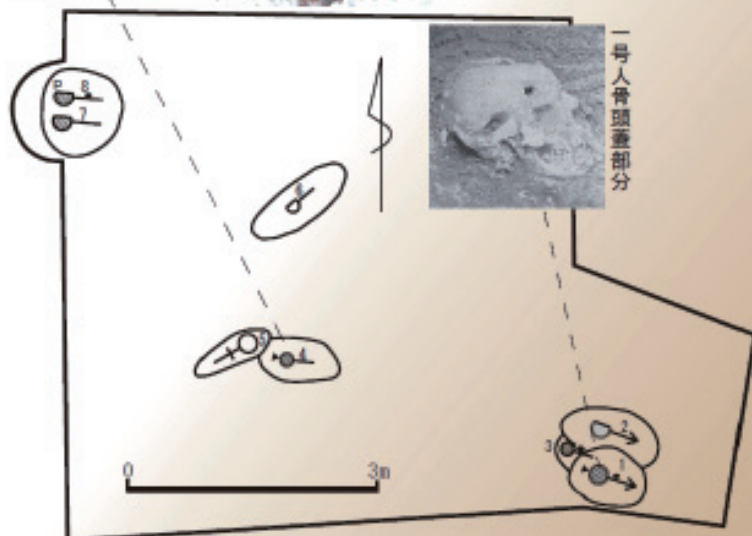
河口から約3km上った米代川左岸、浅内台地の北縁に位置する縄文時代晩期の貝塚です。昭和三〇年、三二年、三三年の三回にわたって、発掘調査が行われ、八体の人骨が確認されて、晩期前半の墓地であることがわかりました。八体の人骨のうち、頭を西に向けたものが六例、南西および北東に向けたものがそれぞれ一例づつあります。年齢性別では一号、二号人骨が成人男性、三号が成人女性で、他は幼児あるいは少年で性別不明です。二号人骨では抜歯された跡が認められました。また、埋葬に際して一号、三号、四号、七号、八号人骨では頭部にベンガラが塗られ、さらに一号、四号人骨では、頭蓋を鈍器で叩き穴を開けた痕跡が認められました。



四号人骨



四号人骨頭蓋部分



一号人骨頭蓋部分

牙製腕飾りと鹿角製腰飾

貝輪のほか猪の牙で作られた腕輪もあります(右写真左列4点)。牙を加工し両端に穴をあけ、数個を紐で結んで腕輪としました。また、腰飾りと考えられる鹿角製品も出土しています(右写真右列2点)。上の1点には赤いベンガラが塗られています。



匙形土製品・土製耳飾り・岩版・玉類

左端は匙の形に作られた土製品で丹念に研磨されています。白色凝灰岩製の岩版は大きな渦巻文の下に小さな渦巻文を3つ配置しています。完形品ですが岩版としては小型の例です。大型品の破片を再加工したものかもしれません。

- ♂ 男性
- ♀ 女性
- 幼 幼児
- 未 未詳
- 抜歯
- 叩き
- 横位
- 頭蓋穿孔
- ベンガラ塗布
- 小玉
- 貝輪
- 土器

柏子所貝塚墓地構成と頭蓋穿孔人骨

遺体変形と土偶祭祀

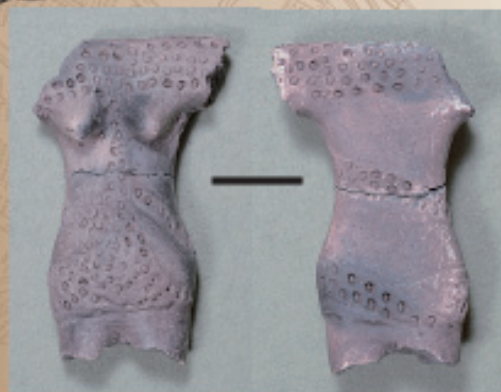
柏子所貝塚の人骨のうち一号人骨と四号人骨は埋葬に際して、石斧のような鈍器で前頭部に穴を開けた痕があると報告されています。この奇妙な風習にはどのような意味がこめられているのでしょうか？ 柏子所貝塚から北へ5km、米代川対岸の杉沢台遺跡では最近の発掘調査で縄文時代晩期の土坑墓群が見つかりました。このうちの一つの土坑墓からは埋納された土偶が見つかりました。後頭部には製作時に星形の穴がヘラ状工具で押し開けられています。土偶は埋納時に頭をもぎ取られ、胴体は仰向けに頭は後頭部の穴が見えるよう反転して置き直されていました。

首無し火葬骨の見つかった北秋田市藤株遺跡では、はじめから頭の作られていない土偶が出土しました。また、同じ北秋田市伊勢堂岱遺跡の板状土偶は、頭と胴体とが切り離され土坑の中に別々に埋められていました。東北地方や北海道の縄文時代晩期遺跡で出土する土製仮面は、顔面の一部が壊されて出土する例が多いのですが、能代市二ツ井町麻生遺跡の土製仮面は、左目部分が故意に剥がされたといわれています。

土偶が土坑墓に埋納されること自体少なく、その点杉沢台遺跡例は大変貴重な例です。しかしそれ以上に、その後頭部に穴が開けられていたこと、そして埋納に際して後頭部の穴が見えるよう頭だけ逆向きに置いていたことは、同じ能代市の同時期の遺跡、柏子所貝塚の頭部穿孔人骨との関連を推測させる、大変に興味深い事実です。藤株遺跡の首無し土偶と首無し人骨、また、伊勢堂岱遺跡の頭部切断土偶、麻生遺跡の眼を剥がした土製仮面などを考えると、米代川の中下流域では死者ないし、土偶、土面に示されるヒトガタの頭部に何らかの変形ないし損壊を加える風習があったと言えそうです。

亀ヶ岡文化の葬送では、死者に様々な装身具を身に付けさせ、土器をはじめとした副葬品を供えての送り儀礼を手厚く行う例があります。身に付けた首飾りや腕輪などは生前の位階を示す品であると同時に、あの世へ旅立つ死装束であったと考えられます。また、各種の副葬品も同様なこの世の位階表示であるとともに、あの世の生活に必要な品であったことでしょう。こうした死者に携えさせた品々がある一方で、明らかに遺体そのものを変形する行為が柏子所貝塚では認められました。同時代、同地域の土偶や土製仮面の損壊とあわせて考えれば、亡骸に添えた品々が現世から彼岸への連続を示すのに対し、この世での生を終えたものに対する消えることのない印を施したものと考えるかもしれません。

華麗な土器文化の陰にかいま見ることのできる、怪異な呪術世界です。



藤株遺跡の首無し土偶

高さ11.5cm。円い工具を突き刺した刺突文が腰から腹部、胸の中央を通り、裏側もかけて肩全面に施されます。本来頭がのる位置も文様で満たされ、初めから頭が作られていなかったことがわかります。



杉沢台遺跡土偶とその出土状態

土偶は高さ15.5cm、厚さ3.4cmで、中空に作られています。後頭部には星形に開けられた穴が見られます。土偶が出土したのは長さ1m余り、幅80cm余りの土坑の底、南東側に寄った位置です。頭はもぎ取られ、裏返しにし、首の付け根に直角に置かれていました。



麻生遺跡の土製仮面

直径約14cm。亀ヶ岡文化の土偶、遮光器土偶と同じ特徴の目が表現されます。明治の頃に東京大学の調査で世に知られることになりました。左目が剥がれていますが、鼻梁にもひびがあり、故意に剥がされたものではないか、といわれています。



虫内 I 遺跡

(横手市山内)



遺跡は、奥羽山脈西側を流れる横手川沿いの山間にあります。三年にわたる調査の結果、数棟の堅穴住居跡、一五三基の土器棺墓、一七一基の土坑墓などが見つかり、縄文時代晩期前葉に複数のムラが集まって営んだ共同墓地の遺跡であったことが確認されました。

土器棺墓は幼児用、土坑は成人用の墓と考えられます。これらの墓は中央にある広場を取り囲むように配置されていました。中央部には建物跡や住居跡があり、その上に大量の土器を含む厚い盛り土がありました。人々がお祭りや儀式を行って積み上げたようです。

たくさんのお墓の分布をよく見ると、何ヶ所かのまとまりがあったようです。そのまとまりは、「家」ごとの墓地を表しているのかもしれない。亀ヶ岡文化の社会がどのように墓地に反映されているか知るうえで貴重な遺跡です。

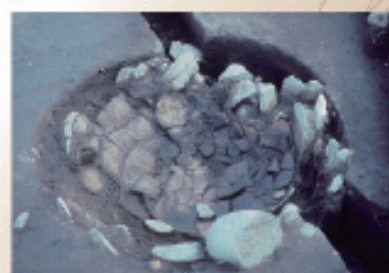


虫内 I 遺跡全景

北側上空から撮影した写真。左上に流れる川が横手川です。



墓地を覆っていた土を発掘している様子



墓の上に積まれた土器

たくさんの土器が積み重なって出土しました。取り上げて復元した結果、全部で5個の深鉢であったことがわかりました。墓の上に積まれた土器が遺体の腐朽とともに、墓穴の中に落ち込んでいたようです。



入れ子の土器棺

大きな深鉢にひとまわり小さな深鉢を納めています。手厚い葬り方がされた土器棺墓です。



突起のある深鉢

棺に使われた土器ではありませんが、突起のある深鉢です。亀ヶ岡式土器のはじまりの頃の土器で、口の部分のこうした突起はこれを最後に消えていきます。



香炉形土器と出土状態

共同墓地であった虫内 I 遺跡では折々に人々が集まって、祈りを捧げる儀式が行われたことと思われます。厳粛な雰囲気を出すための香は、そうした場面に必要だったでしょう。丁寧な作りの香炉形土器2点が出土しています。

ほり うち 堀ノ内遺跡

(湯沢市三関)



遺跡はJR奥羽本線三関駅の南東四百m、東鳥海山西麓の緩斜面が沖積地に移ろうとするところにありました。
平成十五・十六年の調査の結果、縄文時代後期末から晩期前葉の四百基をこえる土坑墓や柱穴、火を焚いた跡などが見つかりました。調査区の遺物が集中する範囲からは、さまざまな形の土器、石棒・石剣などの石製品、土偶・動物形土製品などの土製品が出土し、墓とそれにもなう祭祀の場所だったことが分かりました。
また、数多くの打製石斧が出土しました。それらをよく観察すると完成品のなかに一定量の未製品があることがわかりました。遺跡の中で石斧作りも行われ、でき上がった斧は墓穴を掘るために使われたと考えられます。



配石遺構
調査区の東縁にあった石を敷き詰めた遺構です。墓地への入り口、ないし何らかの儀式が行われた場と思われます。



遺跡全景
遺跡を西側上空から撮影。たくさん見える穴が土坑墓および土器棺墓の跡です。その東側から多くの遺物が出土しました。



人面装飾付土器と出土状態

球胴(きゅうどう)の体から二柱の筒が立ち上がり、その上に眠ったような顔立ちの人面が付けられた土器です。人面の周囲や二柱の筒、胴部には三叉文が施され亀ヶ岡文化の初めに作られた製品であることがわかります。土坑墓の縁の部分に立てかけられて出土しました。

動物形土製品

水鳥、海獣、亀などの形を模したものではないかと、諸説いわれる動物形土製品が4点出土しました。大形のものには中空に、小形のものにも貫通孔があります。北海道を含む縄文時代晩期の東日本で出土する土製品です。



打製石斧および未製品

堀ノ内遺跡では総数376点の打製石斧およびその未製品が出土しました。遺跡の基盤の礫層に含まれる緑色凝灰岩を加工し制作したようです。墓地の墓穴を掘るのに用いられ、役目を終えた斧を集めて、「モノ送り」の儀礼を行っていたことが考えられます。



縄文人と黒曜石

黒曜石は、その鋭い切れ味と質の良さ、そして黒く光る魅惑的な美しさからでしょうか、旧石器時代以来、平安時代にいたるまで石器としてさまざまな場面で使われました。亀ヶ岡文化の墓城が見つかった秋田市戸平川遺跡と湯沢市堀ノ内遺跡でもたくさんの黒曜石が出土しました。

黒曜石は溶岩が固まってできた天然のガラスです。世界有数の火山国日本では現在、百ヶ所以上の黒曜石原産地が確認されています。東北地方では約十四ヶ所が知られ、秋田県では男鹿半島の金ヶ崎・脇本に産地があります。黒曜石のもとになる溶岩は火山ごとに元素の比率が違い、それを利用して産地を推定する蛍光X線分析法と呼ばれる方法があります。この方法で分析した結果、興味深い事実が分かりました。戸平川遺跡では男鹿産の黒曜石が九割以上を占めるのに対し、堀ノ内遺跡では二割未満で、六割近くを山形県月山産が占めていたのです。遺跡によって黒曜石原産地が違うことにはどのような意味があるのでしょうか。

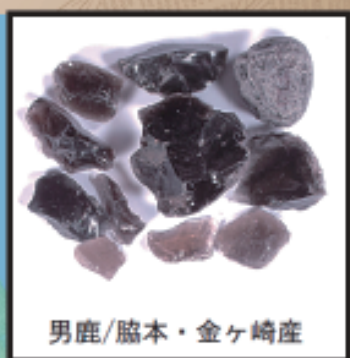
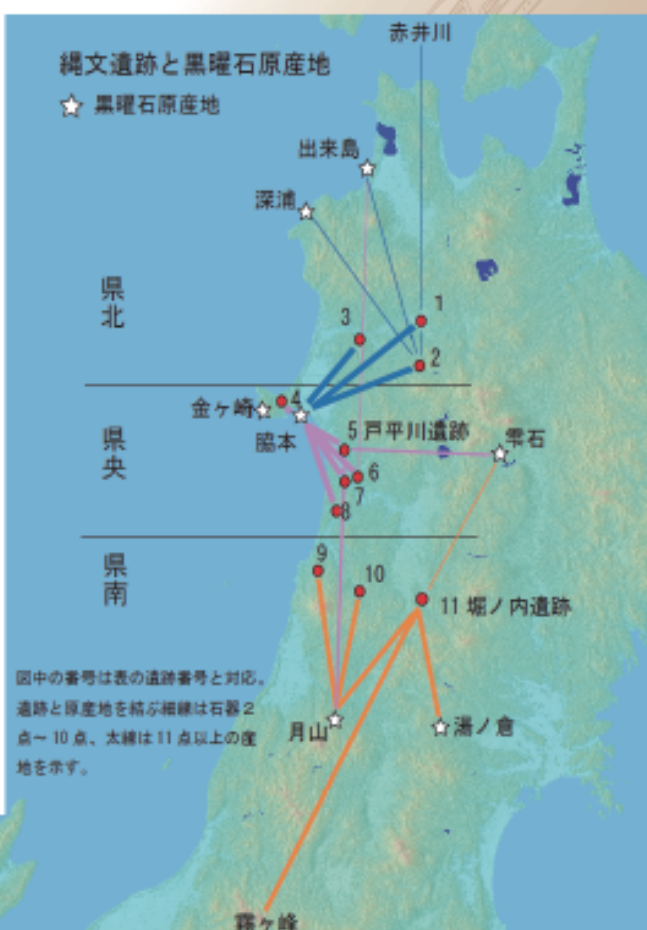
ここで視野を広げ、秋田県内を県北・県央・県南に分け、地域ごとに黒曜石の原産地を見てみましょう(下表)。まず、県北では男鹿産がほとんどで、それより南の黒曜石はありません。漆下遺跡ではさらに北海道赤井川産のものがありました。県央でも男鹿産が中心ですが、新たに岩手県雫石産、山形県月山産の黒曜石がわずかながら加わります。面白いことに、県南では、月山産の黒曜石が中心です。さらに長野県霧ヶ峰産なども多方方面からの黒曜石の流入が見られます。県南では、県北・県央と産地の構成が逆転していることがわかります。

つまり、県北では男鹿産を中心に北海道産もあり、北とのつながりがうかがえる一方、県南では月山産が中心で、南との関係が強そうです。県央はその中間的な様相を示しています。先に見た戸平川遺跡と堀ノ内遺跡の違いは、時期や遺跡の違いをこえた「地域性」といえそうです。

長い道のりを運ばれた貴重な黒曜石にはどのような想いが込められていたのでしょうか。亀ヶ岡文化の墓城がある戸平川遺跡や堀ノ内遺跡では、さまざまな産地から持ち込まれた黒曜石を叩き割るという行為そのものが、死者を送る葬送儀礼と何らかの関係があったのかもしれない。黒い輝きを放つ黒曜石をみていると、そこに込められた人々の祈りの姿が今にも目に浮かんできそうです。

参考 東村武信『石器産地推定法』ニュー・サイエンス社 一九八六年

	県北		県央					県南					
遺跡名	1	2	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
遺跡名	込内	漆下	向標田D	地産傍	島野上傍	泉野冷水	戸平川	松水台置	奥樽傍	龍門寺茶畑	ヲフキ	智者崎	堀ノ内
時期	前期後半	5後期5	晩期	前1後期	前1中期	中期後半	晩期中葉	中期	中・後・晩期	前期	前・後期後半	後期	後期末1晩期初
分析点数	14	22	9	3	8	41	191	118	23	2	198	17	119
赤井川		1											
出来島	1		3		1		1	8				1	1
深浦	1		1	3									1
男鹿	11	21	5		7	39	176	105	21	2	29	2	21
雫石							3	1	1				3
月山						1	2					118	12
湯ノ倉												1	1
霧ヶ峰												25	11
和田原												2	



モノ送りとしての盛り土

亀ヶ岡文化の墓地のある遺跡からは、日常的に使われた道具類としての土器や石器、儀式用の器、そしてまた、石剣や石刀、土偶・岩偶・岩版など儀式で用いられた呪術的な品々など、たくさんのお宝が出土します。それらは、土坑墓内に副葬品として納められたり、特殊な儀式用の遺構にもなっており、見つかることもあるのですが、多くは「捨て場」「盛り土」と呼ばれるように、遺跡のある場所に積み上げられたり、焼土や木炭を多く含んだ土とともに広い範囲を覆って堆積している場合が見られます。

向様田D遺跡では、径一・五〜一・九mの大きさに組んだ石囲炉状の粗石を一番下にして、厚さ八〇cm、面積二五〇㎡の範囲に盛り土が認められました。盛り土の中からは二〇万点の土器破片、二万点の石器が出土しています。虫内I遺跡では土坑墓や土器棺墓のある墓地範囲を覆って、千四百㎡を越える面積の盛り土が確認されました。盛り土はⅡ〜Ⅳの三層に分けられ、最も厚い部分では一m以上の厚さがありました(下図)。このほか向様田A遺跡、湯出野遺跡、地方遺跡、平鹿遺跡などにも、「捨て場」や「盛り土」が作られており、亀ヶ岡文化ではこうした墓地に大量の遺物が集められることがごく普通になされていたようです。

死者へ供えた品々や儀式で用いられた用具以外に、日常的な道具の多くが墓地に集められ、残されていることにはどんな意味があるのでしょうか？

北海道に住んだアイヌの人々には、イオマンテと呼ばれる有名な熊送りの儀式があります。飼ひ養った子熊をある時期にと殺し、その熊の霊に酒やたくさんの食べ物や供えて神さまのもとへ送り帰す儀式です。送り帰された熊の霊は、酒や食べ物によって盛大な儀式が行われたことを神様に報告し、それを聞いた神様は再び人々のもとに熊をはじめとしたたくさんの自然の恵みを与える、そうした自然の豊穰・再生を期待する儀式とされます。飼ひ熊に対する儀式がイオマンテですが、アイヌの人々にとっては日常的に使った品々にも霊があると信じられました。そうしたモノに宿る霊にも同様な儀式が執り行われました。イワクテと呼ばれる儀式です。アイヌの人々には動物であるかモノであるかを問わず森羅万象には霊が宿り、人間が亡くなるのと同じように役目を終えたモノも丁重にあつかってあの世へ送り帰すべきであるとの強い思想があったようです。

墓地から出土する夥しい数の土器や石器、それらはまさに亀ヶ岡文化の人々にとって役目を終えた道具でした。アイヌの人々同様に亀ヶ岡文化の人々もモノの霊を送っていたのかも知れません。



向様田D遺跡の盛り土

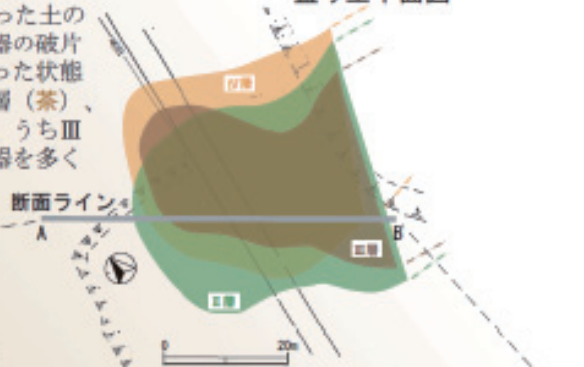
厚さ80cmの盛り土が直径1.5~1.9mに組まれた石囲炉状の粗石の上に積み重なっていました。粗石の中から2つの注口土器が出土しています。粗石を中心に儀式を行い、その後、堅穴住居のように窪んだ場所に土器等を積み重ねていったようです。向様田遺跡群ではこのほかにも、向様田A遺跡でも石囲炉状の粗石を儀式の場とし、その近くにたくさんの土器が積み重ねられた場所がありました。墓地の近くに作られた石囲炉状の粗石は、遺跡を営んだ人々とその祖先の霊が共に住まい交感した、生者と死者の共同の家であったかのようです。

虫内I遺跡の盛り土

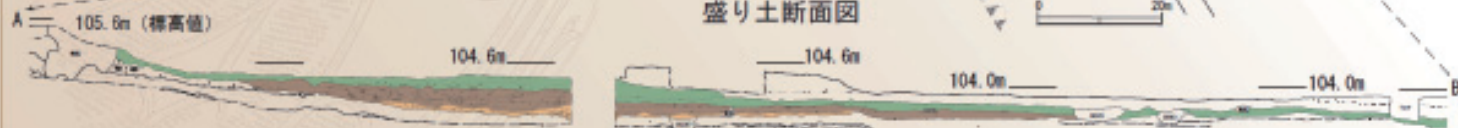
厚さ1m以上に積もった土のなかから、たくさん土器の破片が積み重なって見つかった状態です。Ⅱ層(緑)、Ⅲ層(茶)、Ⅳ層(橙)に分けられ、うちⅢ層がもっとも土器や石器を多く含んでいます。



盛り土平面図



盛り土断面図

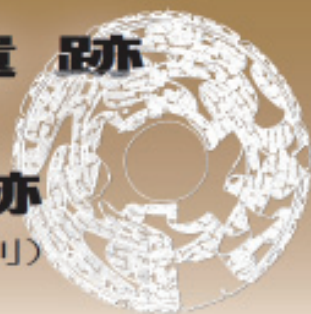


なし ぎ つか
梨ノ木塚遺跡

(横手市増田)

ゆ での
湯出野遺跡

(由利本荘市東由利)



2つ並んだ土器棺

50cmの間隔をおいて、2つの壺が並んで埋められていました。右側の壺には鉢形土器が蓋としてかぶせられています。



土坑墓

長さ1.3m、幅1.2m、深さ55cmの土坑の底、壁に沿って大きさ5～25cmの川原石が1～3段に積まれていました。遺体を納める空間を石で囲ったものと思われます。

梨ノ木塚遺跡
遺跡はJR十文字駅の南東約五・四km、栗駒山から西流する成瀬川右岸の河岸段丘上にあります。昭和五三年の発掘調査では、縄文時代晩期を中心とした土坑墓および土器棺墓が見つかり、墓地在営まれていたことが確認されました。土坑墓は四九基、土器棺墓は五四基確認されています。
土坑墓には遺体を納めて土を埋め戻し、中央に墓標のように川原石を置いたものや、土坑墓の底の縁に石を敷きならべて遺体を納める空間を囲ったものなどがありました。土器棺にはおもに大型の深鉢が用いられていますが、晩期終わり頃の棺は壺とその蓋として鉢が用いられています。
横手盆地の亀ヶ岡文化の墓地は特徴的に土器棺を多用しますが、梨ノ木塚遺跡の墓地の調査はそうした特徴を確認した初めての例でした。

A区土坑墓群

土坑墓群が環状に配置されています。中央の12×6mには土坑墓のない空間があります。土坑墓の中には底に四角の溝跡が残るものがあります(写真下)。板を立て遺体を囲った跡と推定されます。



C区の土器などの捨て場

A区北側はゆるく傾斜していますが、この傾斜面に土器などがたくさん堆積した包含層が確認されました。厚さは80cmにも達します。墓地の儀式で使われた品々が集めて捨てられたものと考えられます。



土偶と顔面レリーフの岩版

C区の捨て場から出土した土偶と顔面が彫られた岩版です。これらの品も墓地の儀式に用いられたものでしょう。

湯出野遺跡
国道一〇七号線沿い石沢川支流の松沢川右岸にある遺跡です。昭和五二年、ほ場整備計画に関係し発掘調査が行われ、縄文時代晩期前中葉の墓地在営まっていたことが確認されました。
調査区は大きく蛇行した松沢川に挟まれた段丘南側からA・B・Cの三地点に設けられ、A地点では土坑墓一〇三基、土器棺八基が見つかりました。A地点からそれぞれ三〇m、五〇m北側のB・C地点では多量の遺物が見つかり、土器などの捨て場とされていたことがわかりました。
秋田県内の亀ヶ岡文化の墓地には、たぐさんの土器・石器などの捨て場や盛り土が伴うことが知られていますが、湯出野遺跡の調査はそうした事実を明らかにした最初の例となりました。

まえ どおり
前通遺跡

(横手市杉目)

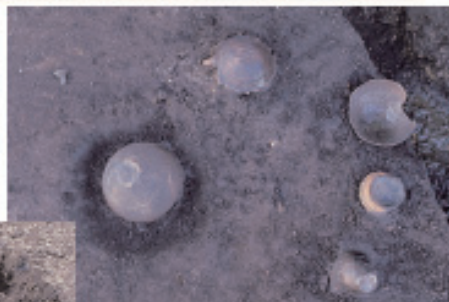
ひら か
平鹿遺跡

(横手市増田)



前通遺跡
遺跡はJR奥羽本線後三年駅から南東に約3km、横手川の支流杉沢川右岸の段丘上にありました。

平成十二年の調査の結果、縄文時代晩期の堅穴住居跡一軒、捨て場一ヶ所が見つかりました。捨て場は段丘を開いた沢のなかに形成され、たくさん土器等を含む土が一・五mの厚さで堆積していました。堆積した土には焼土や多量の木炭、そして灰が混じり、しばしば火が焚かれていたこと、土器に混じり、石刀や石棒、岩版など祭祀的遺物が数多く捨てられていたことが明らかにされました。祭祀に使用された様々な道具があり、頻繁に火が焚かれていたことから、たんなるゴミ捨て場ではなく、神聖な場と意識されていたことがうかがわれます。生活痕跡は希薄ですが、亀ヶ岡文化の人々が使った品々のモノ送りの場として機能したようです。



捨て場の出土土器
捨て場からは鉢や壺、注口土器など、復元可能な個体が120個以上も出土しました。



墓地の中の儀式の場

土坑墓や土器棺墓からなる墓地の中に、石を組んだり敷いた遺構が見つかりました。右の写真の遺構はその位置関係から、円形住居状の遺構中央に四角い石囲炉を、縁の一角に扇形に石を敷き詰めたと考えられます。



平鹿遺跡
横手盆地の南側、雄物川支流成瀬川右岸、標高一・三mの扇状地上にある遺跡です。縄文時代晩期後葉の土坑墓百二十七基、土器棺墓三〇基が見つかり、墓地のある遺跡であることがわかりました。土坑墓や土器棺墓に混じって、儀式が執り行われた石組ないし石敷の遺構も見つかっています。二m×二・五mの浅い円形の掘り込みの石敷の遺構を詰め込んだ遺構、四角く組んだ石囲炉に少し離れて長さ一・二m、幅二mの扇形の石敷きを組み合わせた遺構、そして一辺が五mを超える方形囲いに石を並べた遺構などです。

これら儀式を執り行った場で使われた土器は、完全に近い状態で集められ、掘り窪めた穴に入れられたり、地面に積み上げられていました。



平鹿遺跡出土土偶頭部

亀ヶ岡文化後半の土偶は、前半に比べ目鼻口など顔面の造作がやや簡素化した印象を受けます。しかし、髷は角状に張り出したり、大きく巻いたり、むしろより大きく表現されるようになります。



積み上げられた土器

ほとんど完全に近い土器が8個まとまって積み上げられていました。

呪術具としての装身具

人々が身に付けるアクセサリーは、古くは旧石器時代からあります。石を円盤ないし三角形に削り出し、孔をあけた簡単な作りのものがほとんどですが、おそらく頸にかけたペンダントとして用いられたものでしょう。縄文時代にはペンダントだけでなく、様々な装身具が登場します。耳飾や櫛などは縄文時代になって現れます。亀ヶ岡文化の人々も様々な装身具で身を飾りました。とくに漆塗りを施した櫛や腕輪などは、亀ヶ岡文化の工芸技術の粋をこらした製品です。

土偶の中にも櫛や耳飾を表現したものがああります。人の姿形をまね、折りの道具として製作された土偶にすら施された櫛や耳飾りには単なるアクセサリー以上の意味があったのではないかとさえ考えさせられます。

ところで、こうした装身具は亀ヶ岡文化の墓地でたくさん出土します。漆塗りで作られた腕輪や耳たぶに孔を開けて装着する耳飾は簡単に外せるアクセサリーではありませんが、首飾りやペンダントは脱着が簡単に行えます。亀ヶ岡文化の墓地で出土する首飾りやペンダントには、黄泉の国へ旅立つ死者に護符として身に付けさせたものがあつたのではないのでしょうか。子供には子供の、大人にはその性別や位階に応じた装身具を身に付けさせたのかも知れません。死装束であり、呪術具としての装身具です。



漆塗りの腕輪（戸平川遺跡）

植物の繊維を撚り合わせた芯に黒漆と赤漆を重ねて塗った腕輪。太さは5×6mmほどで、直径は6cm程度。



赤彩の土製腕輪（藤株遺跡）

左長さ8cm、右長さ9cm。湾曲させた棒状粘土の表面に、菱形や渦巻きの文様を彫刻しています。左の腕輪の上下両端および中央菱形文のなかに、小さな刺突文を加えた粘土瘤は、元来宝石などの象嵌を粘土細工でまねたものようです。



土製耳飾（堀ノ内遺跡）

粘土で作られた滑車形の耳飾です。表面に三叉文を施したり、爪形の文様や刺突を加えて飾っています。土坑墓やその周辺から出土しました。左上の耳飾、直径5.7cm。

サメ歯化石を使った首飾りと耳栓形の耳飾（平鹿遺跡）

ホオジロザメの歯の化石は光沢があり、亀ヶ岡文化では様々なアクセサリーに使われています。下は耳栓の形に作られた耳飾です。亀ヶ岡文化の後半に多い装身具です。サメ歯の長さ4cm。



と びら かわ 戸平川遺跡

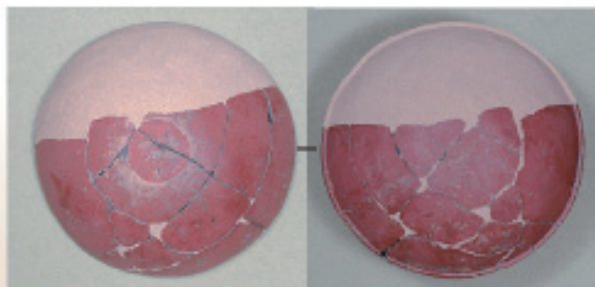
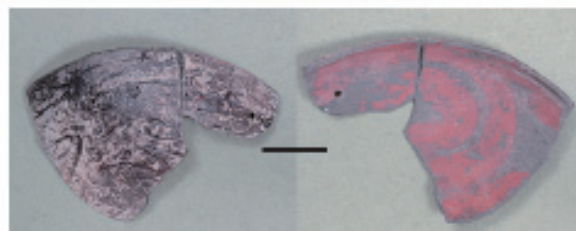
(秋田市添川)

じ しかた 地方遺跡

(秋田市御所野)



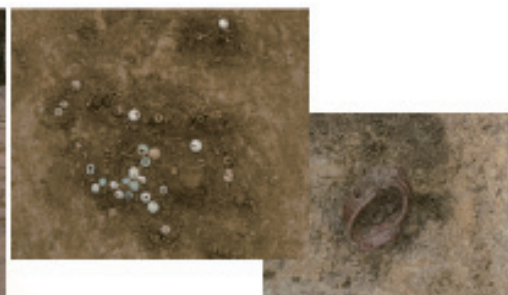
戸平川遺跡
遺跡はJR奥羽本線秋田駅から北に四・二km、標高三〇mの旭川左岸にありました。今は日本海東北自動車道が走ります。
平成七・八年に行った発掘調査の結果、縄文時代晩期中頃の土坑墓八七基や四本柱の掘立柱建物跡五棟が見つかりました。また、遺跡の南側をはしる沢の中からは祭祀に使われた道具が大量に見られました。中でも漆を塗った土器、弓、櫛、カゴなどは当時の漆工芸技術の高さを物語る貴重な遺物で、平成十六年に県有形文化財に指定されました。
赤や黒の漆塗りが施された土器は、墓地の祭祀で使われた当時そのままの輝きを今なお発しています。



沢の中から出土した漆器

調査区の中の沢(写真上・上)からは藍胎漆器(写真上・下)や黒漆塗浅鉢(写真右・上)赤漆塗浅鉢(写真右・下)など各種の漆製品が出土しました。黒漆塗浅鉢の内側には赤漆文様が描かれています。

地方遺跡
遺跡は秋田市の御所野台地を通る国道十三号線北側にありました。四つの群に分かれる五五九基の土坑墓や、二軒の竪穴住居跡、五棟の掘立柱建物跡が見つかり、縄文時代晩期中葉の墓地であることがわかりました。土坑墓はその多くが、重なり合いながら作られていました。死者に供えられた副葬品として土器や石斧・石鎌が出土したほか、身につけた首飾りや赤漆塗りの腕輪、そしておそらくは顔面を中心にかかれたペンガラも残されていました。
地方遺跡では、県南内陸の墓地に多く見つかっている子供用の土器棺が見つかっていません。亀ヶ岡文化の中でも、地域によって死者の葬り方に違いがあったことがうかがわれます。



墓地全景と墓に残った装身具

500基以上の土坑墓が重なり合いながら見つかりました(写真左)。人骨は残っていませんでしたが、土坑墓の底からは首飾りの玉(写真中)や漆塗りの腕輪(写真右)が出土しました。



土製の仮面

土坑墓の周辺から出土した土製の仮面です。顔面の右側は故意に壊された痕が残っています。儀式で使用した後に壊されたものと思われる。



ヒスイの玉と土製の腕輪

土坑墓内やその周辺から見つかったヒスイの玉(上2段)と土製の腕輪(下段)です。腕輪は数個を組み合わせて用い、表面には細かな文様が刻まれています。

亀ヶ岡文化の漆貯蔵容器

漆生産には漆掻きから貯蔵、ナヤシおよびクロメと呼ばれる精製、漆漉しなどいくつかの工程があります。縄文時代の出土品にもこうした漆生産の各工程に関わる道具がありますが、このうち、漆漉しに必要な細かい目の濾し布は今から二五年ほど前、五城目町中山遺跡の発掘で初めて発見されました。今では、全国各地の亀ヶ岡文化の遺跡で見つかっていますが、遺跡からの出土品として確認されたのは、最近のことだったのです。

しかし、漆が貯蔵された容器についての関心は古く、明治の頃から注意され、記録に残されています。亀ヶ岡式土器の膠（ニカワ）ないし漆様の附着物に着目し、その精製および貯蔵過程の容器に言及したのが佐藤傳蔵です。佐藤は「本邦石器時代の膠漆の遺物に就いて」と題した論文で、石器や土偶そして土器に附着する物質について述べた際、青森県亀ヶ岡遺跡出土の土器四点（鉢三、壺一）を図示しました。このうち、鉢については「第二十四図、第二十五図、第二十六図は皆亀ヶ岡より出でたる土器にして内部に膠漆様物質を多量に附着す。その底部の火に焼けたるか如き痕跡あるは想ふに此膠漆様の物質を製造する際に火に掛けたるものと云ふべし。果たして然らば此等の土器は此膠漆様附着物を製造するに使用したるものなるべし」と述べ、石織や土偶の固定に使う膠または漆のような物質を製造する際、熱を加えるのに用いたと考えました。ところが、もう一つの壺については「第二十七図も亦亀ヶ岡より出でたる土器なるが膠着様の物質殆ど其中に充実す。其底部の火に掛り居らざると其膠漆様物質の夥多なるとは前三者と其趣を異にする所以にして従て此土器は製造の際之を使用したるにあらずして已に製造し終わりたる者を此中に容るゝに用ひたるなるべし」と述べ、既にできあがった物質を貯蔵した容器と推定しました。

佐藤は「膠漆様物質」について漆と特定しているわけではありません。「一種の水炭化合物 (Hydro carbon)」であってその特定には化学的分析が必要なることを付け加えています。しかし、土器図版に付けられたタイトルは、「Collection with the Lager-like Substance from the Stone Age Sites in Japan」で、「glue” な” colloidal” はたな” Lager-like” と英語表記している点からは、佐藤が漆ないし漆様の樹脂の可能性を考えたことが推測されます。しかし、漆生産には土器が赤く変化するほどの高熱を加えることはありません。このあたりに「膠漆様物質」と呼んだ理由があったのではないのでしょうか？

佐藤傳蔵

「本邦石器時代の膠漆の遺物に就いて」『東京人類学会雑誌』第一三二八号 一八九七年



中山遺跡の漆漉し布（部分）

長さ13cm、太さ10～16mmで、全体に左に捻られた漉し布です。布目は細かく経糸間隔は1cmの間に8～7本、緯糸間隔は10本もあります。顕微鏡で断面の観察した結果、経糸・緯糸とも苧麻を材料に作られたことがわかりました。



佐藤傳蔵の示した

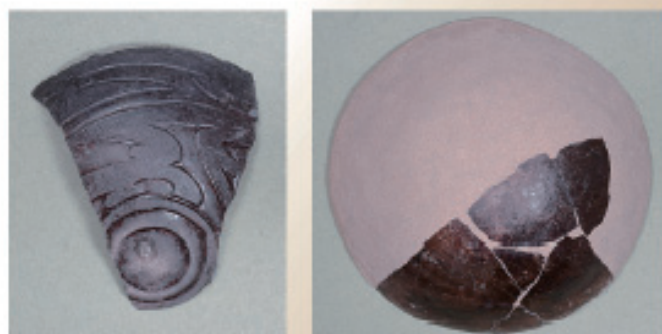
「膠漆様物質」附着土器

亀ヶ岡遺跡出土として示されています。形・文様の特徴からいずれも亀ヶ岡文化の終わりに近い土器です。



漆下遺跡の漆貯蔵土器

亀ヶ岡文化以前、縄文時代後期の漆貯蔵土器が、70点ほども出土しています。小型の壺や鉢を使っています。内容物の状態は赤色の顔料が混ざられたもの、薄い膜状に附着するもの、塊になって表面に縦皺が認められるものなど、各種あります。精製工程や塗り工程などに応じた各容器があったようです。



戸平川遺跡の漆塗り土器

黒漆の製造には油煙、あるいは砂鉄の酸化作用を用いたなどといわれますが、左の土器は顔料のない透明漆が黒く発色したものと分析されています。右の土器の漆膜は透明な茶色で、これも顔料の混ざられていない透明漆がかけられています。

じぞうでん 地蔵田遺跡

(秋田市御所野)



地蔵田遺跡全景

61×50mの大きな円い溝（木柵の痕跡）に囲まれた中に、小さな円い溝の住居跡がいくつか配置しています。木柵奥の外側には土坑墓と土器棺墓が道を挟んで列状に並んでいました。亀ヶ岡文化後のムラの姿を示しています。



土器棺の埋設状態

土器棺は全部で25基見つかりました。大型の広口壺を地中に埋め込んでいます。棺の上に鉢を逆さにかけたり、平らな石を置いて蓋としたものがありました。



8号土器棺（遠賀川系土器）

高さ50cm、胴部最大径44.5cmの大型の広口壺です。頸と肩の境、肩の下に3本一組のヘラ描きの線が巡っています。



最後の土偶

亀ヶ岡文化の伝統を汲む土偶が出土しています。腕の先は短く簡素化されていますが、大きく結われた髪は亀ヶ岡文化後半の流れにあることを示しています。西日本の弥生文化の中にはこうした土偶をみる事ができません。西日本の土器の影響を受けながらも東北地方の縄文文化の伝統を受け継ぐことを示す品です。

今から二千三百年前、亀ヶ岡文化の終焉、すなわち縄文文化の終わりに近く、日本列島の西の果て、北九州遠賀川の地から、弥生文化の影響が日本海の沿岸を伝って秋田にも及んできました。

秋田市御所野にある地蔵田遺跡は、そうした影響を受けた遺跡の一つです。東西六一m、南北五〇mの円形の範囲を木柵が囲い、その内側四ヶ所に三、七回建て替えられた住居群がありました。また、木柵の外側南東には、墓道を挟んで土坑墓と土器棺の列が並んでいました。遺跡は東北地方の亀ヶ岡文化後の状況を伝えることの重要性から平成八年、国史跡に指定されました。

土器棺には大きな壺が用いられ、蓋には平たい石や鉢形土器が使われています。壺の肩の部分には三本の平行する沈線で文様が描かれており、その特徴が遠賀川系土器の影響を受けたものと考えられています。

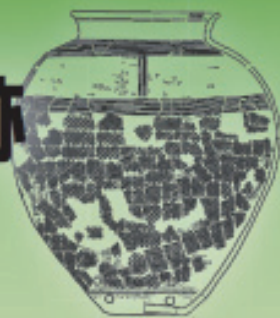
湯ノ沢F遺跡出土高杯

地蔵田遺跡の近くにある湯ノ沢F遺跡から出土した高杯です。亀ヶ岡文化の流れを汲む変形工字文で表面が飾られます。



たて うえ 館の上遺跡

(三種町鵜川)



遠賀川系土器と在地土器

土器棺には写真右上のように表面に縄文がなく全体に磨かれた土器と写真左上のように縄文が施された土器とがあります。前者は広口の壺、後者は口の下がやくびれた甕の形です。縄文のない広口の壺は遠賀川系の土器（下図番号色緑）、縄文のある甕は在地の土器（下図番号色茶）と見ることができます。ただし、広口の壺でも胴の下半に縄文が施される例もあり、それらは折衷形の土器（下図番号色赤）といえます。なお、198は縄文のない壺ですが、形や土器の厚さから在地の土器（=亀ヶ岡系）と判断されます。

遺跡は秋田県沿岸北部、八郎潟の北岸に近い標高三〇mの海岸段丘上にあります。土坑墓五六基、土器棺二四基が見つかり、墓地であることがわかりました。

墓地は東側に向かって突き出した細長い台地上に営まれていました。土坑墓はこの台地の縁に南北に長軸をそろえて作られており、死者が身に付けた首飾りなどが残されていました。また、壺や甕を用い子供の子供の遺体を納めたと思われる土器棺からは、石製のペンダントが見つかりました。

土器棺に用いられた壺形土器には、胴の部分に、遠賀川系土器と共通する三〜四本の線で文様が描かれた土器があります。地蔵田遺跡と同じように、亀ヶ岡文化の終焉後、日本海伝いにいつきに北上した西の文化の影響が色濃く残る遺跡です。



土器棺墓にはいくつかのまとまりがあります。台地東端近くには3つのまとまりがあり、まとまりAは折衷形中心、Bは遠賀川系・在地・折衷形、Cは在地の土器からなります。台地西側Dは分散しますが、遠賀川系が中心です。

縄文造形の華

「亀ヶ岡文化―縄文造形の華―」いかがでしたでしょうか？

日本列島の縄文時代には、各地で特色ある文化が展開しました。東北地方北部でも時代を追って特色ある文化が興りました。三内丸山遺跡に代表される円筒土器や大型住居によって特徴づけられる前期から中期の文化、大湯環状列石等で知られる後期の環状列石の文化。亀ヶ岡文化は、これら東北地方北部の縄文文化の伝統の上に成立し、時代の最後を彩った文化です。秋田県内でも多くの亀ヶ岡文化の遺跡があり、土器をはじめとした数々の優美な工芸品が出土していることを知ることができました。

しかし、一方でそれらの出土品のほとんどは、墓地で執り行われた儀式に伴い集められ、残された品々です。社会維持のために欠かすことのできなかった祭祀その営みとして連続と続けられた、先祖を祀る儀式に用いられた品々です。人々はその儀式のためにも技術の粋をこらしてこれら工芸品を製作しました。

長い縄文時代の最後に東北地方に登場した亀ヶ岡文化の優品は、高い製作技術を示すと同時に、現代のわたしたちが生きる社会や精神文化の基層の一つをなすものでもあることを教えてください。

わたしたちは何処から来て何処へ向かうのか、日本列島の悠久の歴史に咲いた造形の華、亀ヶ岡文化の出土品を通して、過去と、そして未来とに想いを馳せていただけたら幸いです。

謝辞

本企画展の開催にあたり、つぎの機関・各位に多大なるご協力を賜りました。記して御礼申し上げます。

秋田市教育委員会・北秋田市教育委員会
能代市教育委員会・横手市教育委員会
大館市立中央図書館・秋田県立博物館

小川忠博氏・早川和子氏・小杉山敬三氏

本パンフレットでとり上げた遺跡については、以下の発掘調査報告書等で詳細を知ることができます。

秋田県文化財調査報告書 第三四六集	二〇〇三年	向塚田A遺跡(遺構編)
秋田県文化財調査報告書 第三七〇集	二〇〇四年	向塚田A遺跡(遺物編)
秋田県文化財調査報告書 第四四五集	二〇〇九年	向塚田A遺跡
秋田県文化財調査報告書 第三九二集	二〇〇五年	向塚田D遺跡
秋田県文化財調査報告書 第八五集	一九八一年	藤株遺跡発掘調査報告書
秋田県文化財調査報告書 第三三九集	二〇〇二年	からむし岱I遺跡
北秋田市文化財調査報告書 第二集	二〇〇六年	森吉B遺跡・二重島A遺跡
秋田県文化財調査報告書 第八集	一九六六年	柏子所貝塚
秋田県文化財調査報告書 第二七四集	一九九八年	虫内I遺跡
秋田県文化財調査報告書 第四三二集	二〇〇八年	堀ノ内遺跡
秋田県文化財調査報告書 第六三集	一九七九年	梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書
秋田県文化財調査報告書 第三五一集	二〇〇三年	前通遺跡
秋田県文化財調査報告書 第一〇一集	一九八三年	平鹿遺跡発掘調査報告書
秋田県文化財調査報告書 第二九四集	二〇〇〇年	戸平川遺跡
秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財遺構確認調査報告書	一九九六年	地蔵田B遺跡
秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財遺構確認調査報告書	一九八七年	地方遺跡・台B遺跡
秋田県文化財調査報告書 第二九八集	二〇〇〇年	館の上遺跡

平成21年度 第2回企画展パンフレット 「亀ヶ岡文化-縄文造形の華-」

発行日 平成22年1月15日

秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802

所在地 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地

電話 (0187)69-3331

FAX (0187)69-3330

展示品出土遺跡

